
航空障害灯

基

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

航空障害灯

【Nコード】

N9035W

【作者名】

基

【あらすじ】

八重子は24歳。年齢Ⅱ彼氏いない歴。男友達なし。このままではいかんと県が企画したお見合いイベントに参加。2泊3日の企画で、その最終日の告白タイム。

頼む、来てくれ、及川イケメン！と願ってたら、ほぼ初対面の麻生弘行に指名される。なんでじゃー！！！！！？

単純な八重子と我が道を行く弘明。マイペースな2人の少し変な結婚話。

盛り上がり？ なんですかそれ状態。

主人公たちにならってマイペースに書いていこうと思うので、不定期連載です。

究めて貧相と言える身体をした青年は、ひょいっと八重子の手をとった。

びっくりして八重子はばつと顔をあげた。

「……」

「……」

目が合って、相手も気まずそうに目をそらそうとする。といっても、長い前髪でよくその表情をうかがい知れることはできない。

「おお、麻生さん、相川さんを指名しましたー！ー！ー！ー！」

司会がメガホンを通して大音量で叫ぶ。周りのどよめき、歓声があがる。

「『ちよつと待った』の人、おられたら手をあげて下さい！ー！」

相川さんに『ちよつと待った』の人いませんか？ー！ー！」

司会がテンション高めに辺りの男性陣を見回す。が、手をあげる人皆無。

お、及川くん！ー！」

八重子は急いで及川の方を見たが、彼はにこやかに拍手していた。そう、にこやかに。

ちよつ、及川！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ おつまえ、お宅訪問の時、私行

ったじゃんかー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ ちよつとはフラグ立てて、手をあげろ

！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ おい、及川！ 頼むから、手をあげろおおお！ー！ー！ー！。

つか誰かマジで誰も手をあげねえ！ いやそこはお愛想でも誰か手をあげようよ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「はい、ではめでたく麻生&相川カップルが誕生しましたあー！」

司会者にバンザイされ、拍手喝采を浴びた。

この状況ナンダ。

麻生弘行という人はひょろりと、尋常になくひょろりとした人だった。悪くいえばガリガリ君。（私は心の中で即行モヤシというあだ名を付けた。）

身長はまあまあ高く、180近いと思われる。……きっと成長期に時にタテに伸びすぎて、横にできなかったんだろうなあ。筋張っているが、筋肉なさそう。てか確実にないだろう。女子は、男子は細マッチョで高身長がいいとよく言うが、彼はきつと細くて高いしか合っていない。マッチョどころか、ガリガリすぎて肉体労働を少しでもすれば骨が折れてしまうのではないかとこっちがよけいな心配をしてしまうほどだ。

今どき、というよりただ単に髪を切るのがめんどくさがったようなボサボサの茶髪。そこからずっと通った鼻筋が見える。ぼんやりとした目。白い肌だなあ。私より絶対白いよ。

モヤシ体型といい、色白といい、……（自重）。

と、ここまで、自分の外見を棚に上げて、私は彼を分析してみた。しかし、彼とはフリータイムの時も喋ったことがないような……？ あれ、なんで私指名されたんだろ。

指名タイムが終わり、私たちは3人掛けのベンチに2人で座っている。3人掛けなので、2人の間に約人1人分の隙間ができるほどのぎこちなさだ。

おおおい。気まずいよー。頼む、なんか喋ってくれー。

男50女50の合計100人のでっかいお見合いイベントは2泊3日で今日は3日目だ。1日目にみんなの前で自己紹介して、そこから女子は輪を作って、その周りを男子の輪が囲む。そうして1対1で男女で自己紹介とか軽くお話して、3分ごとに次の人に替わって、最終的に一周したら終わり。その間にお目当ての人を見つけて3日間の間に距離を縮めていく……みたいなイベントだ。

今日で通算3日目。最終日。ああ3日間の間いろいろなあったなあ。BBQしたり、ケイドロしたり、カラオケ合戦したり、お宅訪

問したり、牧場体験したり、キャンプしたり、温泉行ったり……。楽しかったなあ。それで、3日目の最終日の今日、殿方たちは気になる女子を指名して、最後のアプローチし、うまく行ったら付き合うみたいな流れだったはず。そんな3日間だったはずなのに、最終日の今日ナンダコレ。

3日間の間にほぼ喋ったことがない人に、指名されて2人つきりなってる状況って。

ちらりと相手をもう一度見るが、ええと指名された割にまったく会話の兆しが見えん。指名されたからには、い、一応この人私に気があるって思っているんだよね？ え、不安になってきた。だって指名してこのベンチに座ってから会話皆無だよ？！ そもそもなんで指名されたのか全くわからん！ お世辞にも私は美人じゃないし、せいぜい下の下の下だ。中学の頃なんか残念な容姿と残念な性格で若干男子にイジめられてたぐらいだし。うわ、昔を思い出してブルーになってきた。やめよう。この思考回路そっこうやめよう。

と、ここまで普段使わない頭を酷使したせいか、疲れて私は考えるのをやめた。

うむ。まず話しかけてみよう。そしたら道が開けよう。

「いい天気ですね。風が気持ちいいです」

そう言いながら両腕を伸ばしてのびをする。深呼吸すると、公園の木々のニオイがすうっと肺に入って気持ちがいい。運動公園にちらばった私たちお見合い御一行はそれぞれ指名された者同士で、公園のベンチに花を咲かせている。指名が重なった女子は何人も男を侍らせて談笑に花を咲かせていた。っと、その中に及川もいる。及川ザマアWW

それに比べ、離れ小島のようにポツンと座る私たちは静かなものよ。おかげで公園に隆々と立つ木々と、その木漏れ日が気持ちよくて昼寝ができそうだ。このモヤシが横に座ってなかったら、ベンチ占領して寝たいなあ。きつと風が夏の熱気を飛ばして、午睡は最高に気持ちいいだろう。

「ほんとだね。昼寝するのに丁度よさそうだ」

ぱっと思わず彼を見た。モヤシは少し口元をゆるめて、空を眺めていた。

「すごい！ 私と同じこと思っていました！ あの、よかったら寝転がりませんか？ あそこに縁台があるから：」

思わぬシンクロに興奮して、少し先にある四角い縁台を指差す。

縁台は大きくて、人2人分くらいで余裕で寝転がれそうだ。おまけに木が影を作ってくれてるので、涼しそうだ。

お見合い企画の最終日に、寝るだけというのはナンダとも思うが、連日のイベント尽くしに私は少々疲れてしまった。普段インドア生活を送ってるし、なにより人見知りで心身ともに一休憩したいなあと思っていたのだ。

そう言うともヤシは腰をあげてくれた。

そして2人でごろりと縁台に寝転がった。

木の床が少し堅いが、これぐらいなら余裕で寝れそうだ。

寝転がると、木の枝から差しこむ木漏れ日と、その先にある青空がとてもきれいだった。

「気持ちいい〜！！！」

あー、これならすぐ寝てしまいそう。

ちらりと横を見るとモヤシはその長いおみ足の足先が縁台から少しはみ出ていた。サンダルを脱いでしまっているの、チノパンの先から足首から下が見える。きれいな爪してるなあ。

片手を枕にして、モヤシは眩しいのか細く目を開けていたが、すぐに閉じた。

「まぶしいんですか？」

起き上って訊いてみる。

「少し眩しい」

目をつぶったまま、枕にしてな方の手を目の上に持っていきモヤシはぼそりと言う。

「じゃあ、これ使ってください。あ、きれいですよ？ ちゃんと洗

ってますから」

ごそごそとカバンをあさり、タオルを差し出した。私はなにかとマイタオルがないと落ち着かない性質なので、カバンにいつも一枚は入れている。今日はたまたま2枚入っていたので、1枚をモヤシに差しだしても、自分の分は確保できるので問題ない。

モヤシは全く脂性じゃなさそうだし、なんだかんだいって指名してくれて嬉しかったのでタオルを差し出した。あのイケメン及川は憎々しいが、このマイペースなモヤシのおかげで最終日に1人にならずにすんだ。そう思うと、タオル1枚ぐらいの親切はしたくなったのだ。

モヤシは少し驚いたかのように目を見開き、起き上った。

「いいの？」

「はい。2枚あるんで使ってやってください。ここ涼しいし、寝るには眩しくない方が寝れるでしょ？」

「ありがとう」

そう言うと、モヤシははにかむように笑った。

あ、笑うと、この人えくぼができるんだ。それにくしゃってした笑顔だなあ。

第一印象は暗そうだなあと思ったが、笑ったらなんとも言えない人懐っこさがある顔だった。

モヤシはタオルを受け取ると、半分に折って、また寝転がってそれを鼻より上にかけた。

「眩しくないですか？」

「うん。ありがとう」

「よかった」

私も寝転がって、同じようにタオルを顔にかける。

ああ涼しい。夏のお昼だと思えないぐらいの涼しさだ。どこかで鳥の音がする…。

そのまますうっと意識が遠くなり、私はマジ寝した。

「相川さん、起きて。相川さん」

ゆさゆさと身体を揺すぶられ、心地よい眠りから無理矢理目覚めさせられた。

うえー、眠いー、やめてくれえ。

「早く起きないと、バス出るよ？ ……置いて行こっかな」

最後の不穏な呟きで、はっと我に返った。

「だ、だめです！！ 今起きます！！ すぐ起きます！！」

がばりと起き上ると、モヤシがあぐらをかいて私を見下ろしていた。

「やっと起きた。ん」

私のカバンを差しだされ受け取る。空を見ると、太陽はだいぶ傾いていた。ええと、もうしかしてこれヤバいんじゃない？

「あ、あの、今何時……」

おそろおそろ訊くと、モヤシは携帯電話で時間を確認してくれた。

「16・43」

「ぎゃあああああ！！！！ ば、バス出てるんじゃないですか？！ すみません、早く行きましょう！！ もしかしたらバス、待ってくれてるかもしれない！！！」

カバンを急いで肩に斜めがけする。モヤシの「お前がぐーすか寝てたんじゃねえか」視線はこの際無視する。

2人でバスまでダッシュ！！！！

一生懸命走るが、運動音痴%運動不足のため全然速くない。我ながら情けない。

公園の中は、あれほどいたお見合い企画の男女の影も形もない。いかん、本格的にやばい。

やっとこさバスが停まっている駐車場に着いたが、時すでに遅し。もうバスが出た後だった。

「うそおおおお！！！！！！！！！！」

「あ、バスいない」

バスが停まっていたはずのところは何一つ残っていなかった。

「置いてかれた――！！！！！！　うわあああ、帰れないいいいいX！！！！　点呼ぐらいしろ、ばかああああ！！！！」

へにやりと膝から崩れ落ちる。

お土産買いすぎて、もうお金なんか残ってないよ。あああああ、こんなことだったら、調子に乗って兄貴の分も買うんじゃないかった
あああ！！！！！！

公園で企画は終わりだったはずだから、このままバスは駅か飛行場に行ったんだろう。

「てか、自由解散で、駅まで送ってほしい人は16…30までにバス集合って言ってたようない。あああ、もう全面的に私が悪いじゃない。あああああ、帰れないい」

帰れないと思って完全に理性リミットが切れて、大人げなくぎやあぎやあわめいてしまった。

だって、ここ公園っていつてるけど、陸の孤島だよ?! ぶつちやけ山奥のキャンプ場の中だよ?! もうどうすんだ、これ。

いい大人がベソかきながらわめているのを呆れたのか、モヤシが話しかけてきた。

「……バスないと帰れないの？」

「はい……。昨日食べたこのクッキーが美味しすぎて、家族とか友達にお土産買ったらお金なくなっちゃって、タクシー呼ぶお金も残ってないし……」

.....

うううううううう、モヤシの「バカだろ、コイツ」っていう視線が痛い。世の中の旦那はお給料が出たら妻に預けて、それで家の運営を任せるって言うけど、私にお金を預けようと思う世の男性はいないだろうな。ああああ、だから売れ残っちゃうのか。いやでも、本当クッキー美味しくて、……。

「乗せていこうか？」

「へ？」

頭の中でぐしゃぐしゃ考えてて油断した。だが、今、天の声が聴こえたような。

「俺、ここまで車で来たから」

へ？

涙をぐしぐしとぬぐって、モヤシをまじまじと見る。

モヤシは特に意識した様子もなく、普通に言っただけ。女の子と同乗するの何でもありますよ。異性経験ない私が緊張するわ。だが、これはとんでもない助け舟だ。野宿から逃れられる！

「え？ い、いいの？ 迷惑じゃない？？」（頼む、迷惑じゃないと言ってくれー！！！！）

「場所による。家どこ？」

「う、遠いよ。A市の藤賀谷町」

「藤賀谷？ 大丈夫」

「ほ、ほんと？ほんとにいいんですか？！！」

こくりと頷くモヤシ、否モヤシ明神仏イエズス様！！！！

「やったああああ！！！！ ありがとうございます！！！！ ああああ、本当にうれしいです！！！！ ありがとうございます！！！！」

寝ていたからかあらぬ方向に跳ねた髪のモヤシを見つめる。おう、モヤシがすぐくデキる人に見える！！

「じゃあ、車あっちだから」

すたすた歩くモヤシについていく。コンパスがでかいので歩くの速いなあ。

モヤシが乗っていたのはセダンタイプの乗用車だった。車に詳しくないため車名とかよくわからん。

助手席に乗るべきか後ろに乗るべきか激しく迷う。お見合い企画に来てるぐらいだから彼女はいないと思うが……、モヤシはたぶん、いや十中八九相手を探しに来てる風ではない。指名タイムも、単にめんどくさかったから適当に私選んだらうなあ。じゃなきゃ、お見

合い企画で2人つきりになったのに、したことが昼寝だけって普通ありえん気がする。そこで嬉々として昼寝した私も私だけど。

ぼおつて車の前でつつ立てると、運転席に乗り込んだモヤシが訝しげにこつちを見た。

「どっちに乗ればいいですか？」

助手席と後部座席を指差す。

「どっちでも」

うーん。助手席は彼女席ってかんじだよなあ。でも2人つきりで車乗るのに後ろ乗るのも…。いいや、助手席乗っちゃえ！

「おじやまします」

助手席に乗り込む。モヤシはエンジンかけて、すぐに公園を出た。

と思った私が、あまかった。

[illegible]

窓全開。風で髪の毛ぐしやぐしやになり、サダコに変貌する。

スピーカーから響く重低音。

ひ
い
い
い
い
い
!!!!
耳が壊れる。

髪で視界困難&耳レイプ（違う意味で）の中、横に座るモヤシを見ると、淡々とだけ口元にわずかに笑み。

ええええええ、家まで車で2時間半。

生きて帰れるだろうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9035w/>

航空障害灯

2011年9月21日03時16分発行